

「復興都市研」の2016年・土地の記憶と都市の形成

一目に見えない潜在的な構造の解読

2011年3月11日の東日本大震災から1年を迎えようとしていた2012年2月、東北の被災地で復興計画づくりに取り組んでいた都市計画コンサルタントの有志が、被災地の復興まちづくりを支援する実践的なプランづくりに取り組む研究会を立ち上げようと集まり、「復興都市研究会」（事務局；昭和(株)）の活動が始まりました。4月3日に第1回「復興都市研究会」を開催し、

（１）被災地の復興に役立てるモデルを検討し、具体的な場を設定したケーススタディを行うこと

（２）震災復興事業の経験を踏まえ、国土の防災計画に広く役立てるプランニングを行うことを確認し取り組みを開始しました。

モデルスタディの場の設定に向けて最初に話し合ったテーマが「**高台住宅地と結ぶ立体防災拠点の開発研究**」、研究会のスタート時は津浪で大きな被害を受けた低地部から高台への集団移転が盛んに言われていたことから、丘陵地ニュータウン再生でのまちのバリアフリー計画の経験を生かして取り組んでみようと、立体都市公園制度を活用した地域開放型施設を住宅と一体に計画し、高台と低地部との連続性を強化した一体的な防災まちづくりについて議論を始めました。9月の第5回研究会から具体的な場を石巻市・日和山に設定して、「日和山復興都市施設計画」に取り組み、翌2013年8月の研究会まで1年間のモデルスタディ活動を取りまとめて、「**避難路を兼ねた災害公営住宅―石巻日和山での一試案―**」として、「区画整理士会報」に掲載しました。

※「避難路を兼ねた災害公営住宅―石巻日和山での一試案―」は「昭和」のホームページ「昭和の英知」に研究レポート2015「復興都市研究会が目指すもの」としてサイトアップしています。

「高台住宅地と結ぶ立体防災拠点の開発研究」は2011年8月4日の「毎日新聞」に並んで載っていた二つ記事から話を展開しています。

★柳田国男の物質の復興だけでは精神の復興にならないという視点から、高台移転の難しさを考察した「津波と村」（山口弥一郎）の複刊を紹介しながら、震災に対する緊張感を失い早くも忘却が始まっているのならばたいへん危険なことと警鐘を鳴らした**石井正巳氏の「何をもって復興とするか」**と問いかける記事と、

★建築家原広司が地形をかたちづくる等高線と別にアクティビティ・コンターと名づけた活動等高線を都市分析に用いていたことを紹介し、整備された新しい物理的等高線にそれぞれの都市が形成してきた歴史的な活動等高線を重ね合わせて未来の都市像を形成すべきだと書いた**鈴木博之氏の「等高線思想」**という記事です。（※二つの新聞記事コピーもホームページの同じサイトに載せています）

「東日本大震災」5か月後に2つ並んで載った記事での二人の主張・警告は、5年が過ぎた今、まさに現実のものになっていると思われます。高台の集団移転住宅の建設も低地部の防災インフラ整備も、被災した人たちのために一日も早く進めたい、復興の仕事に携わっている人はもとより、日本中の誰もがそう考えていました。しかし復興はまだまだ途半ばです。防潮堤の整備も職住分離も色々な課題を抱えていますし、仮設住宅から災害公営住宅への移転への不安、高齢化、孤独死、人口減少、そして出口の見えないフクシマ原発問題を抱えています。津波は天災だが原発は人災、自然と向き合いながらの被災地での営み

を見守り続けなくてはなりません。

消したい記憶・遺構として残したい記憶、柳田国男の視点「精神の復興」の大切さが今また伝えられる復興途半ばの東北の被災地、国土の安全に向けた取り組みを始めた地方都市、震災をめぐる問題意識は「南海トラフ」「首都圏直下型」…国土の防災計画へと広がっています。



左の写真は 2016 年度の活動開始に向けて、3 月 2 日の研究会でメンバーの萩野一彦さんが「地域の自然立地・歴史文化を基本に据えたランドスケープの発想が必要」と提案したパンフです。

そしてその後の、「熊本地震」！

右の写真は 4 月 27 日の 2016 年度最初の研究会で、メンバーの立山善宏さんが担当した調査を終えて報告した「富士市事前都市復興計画」概要版の表紙です。熊本・大分被災地の報道が続く中での研究会だけに「事前復興」という言葉の重みとチャレンジする難しさなどの意見が交錯する場になりました。…

現実の都市がつくり上げて来た活動等高線を見無視してはならないと語りかけた鈴木博之氏は、新聞記事が載って2年半後の昨年2月に亡くなられました。建築史家の第1人者として、追悼記事は東京駅の復元から新国立競技場のザハ案まで多彩な足跡を伝えていました。

鈴木さんには 1990 年に発行した「東京の地霊（ゲニウス・ロキ）」という不思議な魅力を持った名著があります。追悼の気持ちでこの本を読み返し、不思議な魅力（霊力）に触れながら 2016 年の「復興都市研」の活動を考えてみようと思います。

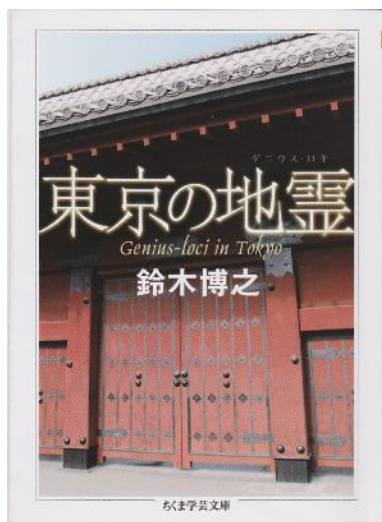
この本のまえがきは「東京の現在は、明治維新以来の首都変貌の歴史の、ひとつの終局を迎えつつあるように思う。」に始まり、「土地には固有の可能性が秘められている。その可能性の軌跡が都市をつくり出してゆく。都市の歴史は土地の歴史である。…土地の歴史という視点は、『地霊』という概念に、あるとこ

ろまでゆくと突き当たる。」ことを伝え、「単なる土地の物理的な形状に由来する可能性だけでなく、その土地のもつ文化的・歴史的・社会的な背景と性格を読み解く…そうした全体的な視野をもつことが、地霊に対して目を開く」と、「目に見えない潜在的構造を解読しようという潜在的な概念」の必要性を訴えて、「私は東京の近代を読み解くための方法のひとつを手に入れた」という言葉で終わっています。

この本で、都市⇄土地⇄地霊について解説しているのはこの「まえがき」と「後記」だけで、それ以外のすべてのページは、東京の13の土地をめぐる話が章立てで取り上げられていきます。「知性派向けの街歩きガイドブック」のような雰囲気で、鈴木さんはこの本を書くのを楽しんでいたような気がします。でも、もしかして…「目に見えない潜在的構造」には地中に潜む断層も含まれていたのでしょうか？

13の土地はすべて東京の都心部の土地ですが、もし今も生きておられたら、東京郊外の都市、地方都市そして海外の都市へと続きを書かれていたかもしれない。そんな気がします。

「復興都市研」は、「東京の地霊」のまえがきにあるような土地の歴史という視点と全体的な視野をもって被災地の復興を見守り、国土の防災計画を考えた研究会活動を続けていきます。



「東京の地霊（ゲニウス・ロキ）」について「知性派向けの街歩きガイドブック」のような雰囲気と書きましたが、13の土地をめぐる話の第1章が六本木1丁目の林野庁宿舍跡地で「民活第1号の土地にまつわる薄幸」という題で始まり皇女和宮まで登場します。そして第2章は千代田区紀尾井町の司法研修所跡地、大久保利通暗殺と怨霊鎮魂のため聖地として誕生した「清水谷公園」の歴史と共に綴られています。

昭和本社ビルからこのガイドブックを手にして「街歩き」に出かけてみましょう。文芸春秋の角を曲がって紀尾井町ビルの前を過ぎ「清水谷公園」の急坂の園路を下ると、緑の中に聳える「右大臣大久保公哀悼碑」が、麹町から赤坂見附への近道としてその前を行き来する多くの人たちを毎日見守っています。

そんな光景を眺めながら立ち止まって碑文を読み、暗殺の土地が迎った1世紀に思い巡らす…。そして「昭和の英知」ととどまらず大正・明治にまで遡って土地の記憶を確かめ、都市形成の英知を磨きながらゆっくり楽しく歩いて行きましょう。

（2016年「昭和の日」に）